



Title	現代日本語可能表現の意味と用法(Ⅱ)
Author(s)	小矢野, 哲夫
Citation	大阪外国語大学学報. 1980, 48, p. 19-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80783
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代日本語可能表現の意味と用法 (Ⅱ)

小 矢 野 哲 夫

On the Meaning and Uses of Japanese Potential Expressions (II)

Tetsuo KOYANO

This paper tries to consider the meanings of Japanese potential expressions excepting potential verbs. In those expressions, we use potential auxiliary verb '(r)arer-u', the verb 'dekir-u', the adjectives 'kanoo-da' and 'fu-kanoo-da', the suffixes deriving verbs '-ur-u/-er-u' and '-kaner-u', the suffixes deriving adjectives '-gata-i' and '-niku-i', the special cases of 'Noun+ga narana-i' construction, and 'Verb+yoo ga na-i' construction.

Generally speaking, the meaning of them is similar to the meaning of potential verbs in basic usage. But, of course, they have their own meanings respectively and those meanings share their position in potential expressions.

3. 可能の助動詞「れる」「られる」の意味と用法

一般に助動詞とされている「れる」と「られる」には、可能のほかに受身や自発（自然可能とも）や尊敬の意味を表わす用法がある。そして、「おばあさん、降りられますか。」（例えばバスの中での車掌のことばとして）のように、この文が尊敬を表わすのか可能を表わすのかが曖昧な場合や、「先生が殴られた」のように、これだけでは受身なのか尊敬なのかわからない場合などがあり、四つの意味が、實際上区別しにくいことがある。しかし、この四つの意味は、基本文型の形では相互に区別できる特徴を備えており、理論的には「れる」「られる」の意味は一義的に決定され得るものである。この節では、可能の意味の「れる」「られる」の用法と意味を考えることにする。

まず、形式的な面で、「れる」は四段活用動詞の未然形に接続し、「られる」は一段活用動詞とカ行変格活用動詞（「来る」）の未然形に接続すると言われている。しかし、四段活用動詞に「れる」が接続する例はさほど多くないようである。なぜならば、四段活用動詞には可能表現の形式として、いわゆる可能動詞が存在するために、「れる」を接続させる形式の必要性が少ないからである。

次に「れる」「られる」の接続に関連して、これらがどんな意味の動詞に接続するかが問わ

れるが、大ざっぱに言って、「有情物の意志的な動作を表わす動詞に接続する。その場合、「可能」が能力・性能・許可などのいずれを表わすにせよ、動詞のこの意味的な特徴は動かないものである。従って「うるおう、恋う、まどう、ととのう、迷う、折れる、倒れる」などの、無意志的な作用を表わす動詞には「れる」「られる」が接続しないか、接続しにくいのである。

第三に、四段活用動詞に「れる」が接続した形式と可能動詞との間で、「可能」の表わす意味に違いがあるのか、同じ意味なのかが問題になる。このことについて、形式が違うのだから、当然意味にも違いがあるはずだという意見もあるだろう。松下大三郎(1930)は、この両者は可能の程度が違うとし、「此の本は文が拙くて読まれない」「道が悪くて歩かれない。」「そんな遠くへ行かれやしない」「きまりが悪くて来られない」などは「容易と困難」を表わし、「字を知らないから読めない」「脚気で道が歩けない」「汽車が不通で行けやしない」「病気では来れない」などは「可能と不能」を表わすと区別している。しかし、「その区別は否定の場合に著しい。しかし絶対の区別ではなく程度の問題であるから通用して構はないのである。」(p. 361-2)と注記しているように、両者は截然とは区別できないのである。次の二つの例は、否定の場合だが、ともに困難を表わすとは言いがたいだろう。

91) (略)、あれは私どもにとってただ笑いすてるだけではすまされぬことでもあるのです。

(『文体』Vol. 2, p. 126, 小島信夫「ルーツ」*前書(二))

92) 一九一九年ではこんな精密な鑑定は望まれないが、ホール巡査が直ちに烏を医師に鑑定させ、それがペラの頭を貫通したと同じ弾によって貫かれていることが確かめられたら、(略)。(大岡昇平『無罪』p. 44)

なるほど、二つの形式には何らかの意味的な違いが感じられることもあるが、容易と可能といった対立だけでは捉えきれないだろう。なぜならば、例えば可能動詞の現在形終止用法だけでも、能力や性能、実現可能性、許可などを表わし得るのであって、容易と可能の二要素だけでは事足りないからである。そして、「れる」自体の現在形終止用法にも能力・性能、実現可能性、許可などの意味を想定し得るから、容易と可能という対立関係は消滅してしまうのである。それならば、他にどのような違いがあると考えられるのだろうか。あるいは、意味的な違いは認められないとすべきであろうか。いずれにしても、これに答えるためには、二つの形式が用いられる種々の条件を考慮しなければならない。その条件として、文法的な環境はもちろんのこと、どんな種類の文章の中で用いられているかといった文体的な環境や、同一の文章の中で二つの形式が現われている場合は筆者に使い分けの意図があるかないかなどが、考えられよう。しかし、このような条件を満たす用例が手もとにないで、今の筆者には答えられない。

「られる」の場合は、「れる」よりも比較的扱いやすいようである。というのは、「られる」には、第三点として扱ったような問題がほとんど生じず、例えば「起きる」と「起きられる」との関係が、「書く」と「書かれる」との関係とではなく、「書く」と「書ける」との関係と対比し得る性格のものだからである。つまり、四段活用動詞の可能表現としては可能動詞を用いるのが普通で

あり、一段活用動詞の可能表現としては助動詞「られる」を接続させる形式を用いるのが普通だということで、可能動詞の用法と「一段活用動詞＋られる」の用法とを対比させることができるわけである。ただ、2.7. (前稿) で扱った「見れる、着れる、来れる」などの、一段活用動詞やカ行変格活用動詞から派生した一種の可能動詞が存在して、表面上、二つの可能表現形式を持つという四段活用動詞に類似した関係が見られはするけれども、この場合には意味的な違いとか表現性の差といった尺度ではなく、「見られる」より「見れる」のほうが音声言語（口頭語）で発音しやすいとか、「見れる」は誤用だという規範意識の有無などの尺度で説明できそうである。

さて、前節で可能動詞の意味と用法について、連体用法、過去形の用法、現在形の用法、アスペクトの形の用法に分けて、それぞれの表わす意味の特徴を見たわけであるが、可能の助動詞「れる」「られる」の場合も、ほぼこれに準じた意味と用法を持っている。

まず連体用法では（連体用法全体を捉えなければ不十分であるけれども）、主要部の名詞が修飾部の述語動詞の、とくに動作者格に立つ関係にある場合、「れる」「られる」が動詞と結合して、その名詞の表わす事物や人に属性として備わっている能力（「百米を十秒台で走られない選手」「百キロの大石を軽がると持ち上げられる男」「間違えないで百まで数えられる幼児」など）、性能（「一分間に十リットルの水を吸い上げられるポンプ」「漢字の音と訓が読み分けられるコンピュータ」「短時間のうちに膨大な数の票を数えてたばねられる機械」、用例 93）など）、性質（「いやなことがあってもすぐに忘れられる人」「何をしても満足感が得られない人」、用例 94）など）といった意味が表わされる。

93) 42 mm 上下に移動し角度を変えられるチルトハンドル。(毎日, 78.5.9 広告)

94) どうもそういうことを書かないではすまされぬやつだ。(『文体』 Vol. 2, p. 128, 小島信夫「ルーツ *前書(二)」)

また、主要部の名詞が修飾部の述語動詞の対象格に立つ関係にある場合は、「れる」「られる」が動詞と結合して、その名詞の表わす、とくに事物の性質が表わされる（用例 95）。

95) すでに十一日、史上五回目の同ツアー四連勝をマークしていたが、さらに更新して初の五連勝、そして十五万ドルを超える賞金獲得総額というルーキーとしては考えられない二つの大記録がつくられた。(毎日・夕, 78.6.30)

一方、固有の格以外の格に立つ名詞が主要部になる連体用法では、主要部と修飾部とはそれぞれ条件と結果という関係が認められる。

96) (略), しかも住宅資金などの借入申込資格も得られる, だんぜん有利な貯蓄です。(朝日・夕, 78.6.6 広告)

97) たとえ運悪く、見たい番組が見られない ときでもビデオが録画。(毎日・夕, 78.6.6. 広告)

98) 生産者米価を上げられる 環境にないと農林省は厳しい姿勢を示しているのに対し、(略). (読売, 78.6.28)

99) 幹部候補生になるのは避けられぬ 運命，なるなら乙種幹候なんてのはあまりほめた心掛けではない。(朝日・夕，78.5.8)

次に，過去形の用法では，可能動詞の場合ほど多様な用例に恵まれなかったが，「過去の特定の時間における可能性・能力の実現を表わす」(鈴木重幸 1972, p. 279) という可能動詞の過去形用法に見られるのと同じ意味を基本として，反実仮想や未来の特定の時点における可能性・能力の実現を表わすものや「過去における可能性・能力」(鈴木，同上) などの意味を認めることは，類推的にも，また現代語使用者としての内省によっても妥当だと予想される。例えば，次のように，

100) 「涼しい。よく寝られた」(毎日・夕，78.7.4)

101) 低血圧気味だから，以前は午前十時ごろまで起きられなかった。(大阪新聞，78.6.18)

102) ところが自尊心の強い夫には，妻が自分以外の人間を尊敬するなんて，耐えられなかったようです。(朝日，78.6.10)

肯定文であれ否定文であれ，これらの文は「寝られる」「起きられない」「耐えられない」という可能性が実現したことを表わしている。ところが，次の例は，文脈上，育てられなかったという，現実とは反対の事実を含んでいると理解することができる。

103) 新興住宅地や，マンションが立ち並ぶ中で，〇〇を育てられたかな，とも思う。(毎日，78.6.10)

しかし，現実实现了か，仮定の上で実現したかという違いは，過去形自体の持っている意味ではなく，その過去形が用いられる統語的な環境の違いによるものであって，過去形の意味としては，ある時点(過去の特定の時点，ある条件が成立した時点など)における可能性や能力が実現したという事柄を表わすのだ，と抽象することができる。

第三に現在形の用法について言えば，前節で述べた理由(前稿 p. 89)によって，超時間的な表現として用いられて属性を表わすものと，時間的な表現(一時的または継続的)として用いられて，ある時点における実現を表わすものとに分けられる。まず前者の意味については，次の例のように，

104) 「あなたには犯人を見分けられますか」と検事が訊いた(大岡昇平『無罪』p. 55)

105) “もう誰も俺たちを止められない”(朝日・夕，78.6.6. 広告)

106) 「妻が病弱で出産に耐えられない」(朝日，78.7.16)

あなたや誰かや妻の能力(広い意味での一例えば知力，判断力，抑止力，体力などを含む)を表わしている。このような意味の場合，例えば用例 105) と同じ広告内にあった「もう誰にも俺たちを止める力はない!」のように，属性としての能力を意味する抽象的な名詞「力」を使って，同等の意味を表わすことが可能であるが，時間的な表現の場合にはこのような言い換えができないのである。

他方，後者の意味では，現時点での実現(107)や，未来のある時点における実現(108)や，条件が成立した時点における実現(109, 110)といった，事柄の可能性を表わすものが見られる。

107) (略)『文体』の編集同人四氏には、並々ならぬ悲壮な決意みたいなものさえ、うかがわれるという点である。(『文体』Vol. 3, p. 27, 若林真の文章)

108) 橋はいつでも架けられるが、一度失われた環境は容易には戻らない。(読売, 78.6.16)

109) 「可能な限りの対策を行うならば、東京など一部の大都市を除いて(旧)環境基準は達成できる。大都市でも、0.03 ppm. までは下げられる」(朝日・夕, 78.7.15)

110) R子さんが「離婚の可能性」に気付いたように、目覚めると、全然ちがった角度で人生をながめられる。(朝日, 78.6.15)

第四にアスペクトの形について言及しておこう。可能動詞の場合には「書けていた」「解けちゃう」「払えてしまう」など、アスペクト形式素が接続した例が見られたが、「れる」「られる」については、「*望まれている」「*食べられてしまう」などの形において可能の意味を表わすとは考えにくい。これらの形では、おもに受身を表わしていると解釈するべきであろう。それでは「れる」「られる」がアスペクト形式素と関係を持つ形式はないかと言えば、そうではない。可能動詞の場合には、そのあとにアスペクト形式素が接続する形式であったが、「れる」「られる」では、「動詞+アスペクト形式素+れる／られる」という形式において、例えば「暮らして行かれる」「暮らしていられる」のように、可能の意味が表わされるのである。

それなら、例えば「書けている」と「書いていられる」とが同じ意味を表わすのかと言えば、そうではない。「書けている」のほうは能力や事柄が実現した結果の状態を表わすが、「書いていられる」のほうは、「書いている」という継続的な状態の実現やそういう状態を実現し得る能力を表わすのである。

最後に、「考える、感じる、認める、見る(考える、の意)」など思考や感覚に関する動詞に「られる」が直接接続する例に触れておく。この形はもちろん、能力や可能性を表わす用法を持っているが、それは、「見る」を除いて、「～を／が」という形の対象格を支配する形においてである。これに対して、対象格が「～と」という引用の形式となって表現される際には、能力を表わすとは言えないようであるし、実現の可能性を表わすと認めることもむずかしい。このような場合は、話手や書手が自分の判断や感じを断定することを避け、判断や感じの内容を一つの可能性として婉曲的に示すことによって、判断や感じに対する話手や書手の責任を回避する表現法だと認めるのが妥当であり、思考動詞や知覚動詞に特有の用法として位置づけることができる。次に用例を挙げておく。

111) このような生活環境が糖尿病発病の誘因になっていると考えられます。(毎日, 78.6.13.)

112) 戦術ダウンに踏み切ったのは健保法等改正法案がほぼ廃案になる見通しのほか、従来打ち出した戦術では一般開業医の間に抵抗が大きく、実施が困難のため、とみられる。(朝日, 78.6.14)

4. 動詞「できる」の意味と用法

動詞「できる」はサ行変格活用動詞「する」の可能を表わす形式である。動詞「する」の可能表現の形式としては、次の用例のように「(～)される」の形が考えられる。

113) (略), これまで“カネとモノ”に偏っていた日本の国際社会への貢献の仕方に、精神面から新しい道を開くことが期待される。(毎日, 78.6.7)

114) (略), 統一実行委の新実行委構想という新しい段階で初めてその態度を表明したことは注目される。(朝日・夕, 78.7.4)

この形式は受身の表現である、とする考えかたがあるかもしれないが、そうだとすれば、この表現においては、未来の出来事を表わすことになる。しかし、この文の述語は、現在期待したり注目したりしていることを表わしていると解釈するのが妥当である。となれば、この「される」は可能か自発を表わすことになるのであるが、「自然に」という意味合いをこの表現に読み取ることができないことから、やはり可能表現であると考えるのである。

理論的には一応このような表現形式も可能であり、用例もあるけれども、「する」の可能表現の形式としては「できる」のほうが多く、普通に用いられるものである。

さて、この「できる」を用いた可能表現の形式として、前稿で、a)「コト名詞+が+できる」の形、b)「モノ名詞+が+できる」の形、c)「コト名詞+できる」の形、d)「節+形式名詞「こと」+が+できる」の形、e) その他の形に、形式上分けたが、このうち、a)とc)とe)の形の「できる」は、容易に「する」に変えることができ、d)の場合は「ことができる」を削除することによって単なる事柄の表現形式に変えることができる。ところが、b)の場合には、そう簡単には事が運ばない。それはなぜか。

現代語の「できる」は、単に可能の意味を持っているだけでなく、事物や事態の発生・出現・成立などの意味も持っているのである。森田良行(1977)によれば、(1)「…ができる」文型で「無形の事柄の生起・成立」、(2)「…ニ…ができる」文型で「具体的な事物の生起」、(3)「…ハ…デできる」文型で「物がある場所で作られる、生産される、という状態」、(4)「…ハ…ガできる」文型で「ある現象を生み出すことを何か(主体)が行う状態にある」などの意味が区別される。この分類は、基本文型の枠組みという外形的な面をおもな基準として意味を記述しようとしたもので、可能の意味は(4)において認められている。これらのうち、「…ガ」の「…」にモノ名詞(具体的・抽象的、有形・無形の事物を表わす)が使われた場合、「できる」の多くは(1)～(3)の意味になる。ところが、名詞の中には、モノを表わすのかコトを表わすのかが、必ずしも明確に区別できないものがある。例えば「食事」という名詞は「みんなで食事をする」「いつかどこかで皆さんと一緒に食事ができたらいいですね」では「食べること」という事柄を表わすコト名詞として、「今日の食事はどれもみな味が薄い」「おいしい食事を作ること」「食事ができあがった」では「食べるもの」という事物を表わすモノ名詞として、それぞれ用いられている。次の用例の「合意」「音楽」「小説」はどうであろうか。

115) (略), 設立に必要な法制化作業に入るための各党間合意が, 早ければ今国会中にもできる見通しになってきた。(毎日, 78.6.7)

116) 「パリがいいか悪いかわからないどこに居ようと自分に合った音楽ができるかどうか問題さ」と肩をすくめた。(朝日・夕, 78.5.8)

117) 五十枚, 六十枚の小説は, チョコチョコと朝飯前では出来はしない。(『文体』 Vol. 2, p. 30, 飯島耕一の文章)

すべてこれらをモノ名詞と見れば「できる」は完成・成立を表わすことになるだろうが, 「合意すること」「音楽を作ること, 演奏すること」と解釈すれば, 「できる」が実現の可能性を表わすと言える。また「小説」については, コト名詞と言えないにしても, 「出来はしない」を「書けはしない」のように可能動詞を使って言い換えることによって, 実現の可能性を表わすと言えるのではなからうか。

次に, a) と c) の形式について。この二つの形式は, 「想像ができる」「計算ができる」と「想像できる」「計算できる」とを比べてみると, 単に形式上「が」が介在しているかないかという違いではなく, 前者の「想像」「計算」は名詞としての働きが強く, 従って連体修飾語を受けたり複合名詞を構成したりする機能を持っているのに対して, 後者のそれは, 「想像する」「計算する」という複合サ変動詞の可能表現形式としての熟合した動詞の機能を持っていると解釈される。

最後に, 「～ことができる」の形式は「～」に意志的な動作を表わす動詞を用いることによって表現されるものである。そこに用いられる動詞は, それぞれの形態的特徴によって, これまでに見てきた可能動詞化, 助動詞「れる」「られる」との結合, 「コト名詞+できる」の形などの形式で可能表現となり得るのであるが, これらの形式はいずれも, それ自体が密接に熟合して, 全体で動詞化しており, 形式上はその熟合した動詞に各成分が従属するという構造をとるものである。これに対して問題の形式は, もとになる動詞が各成分を支配した節全体が, 形式名詞「こと」によって客観化され, 客観化された事柄の実現の可能性を表現するものである。そしてこれは, 分析的な表現であると言える。

5. 「可能だ」「不可能だ」の意味と用法

これらの用法は, 「できる」の用法の a) と d) とに一致する。そして, その表わす意味も, 現在形の終止用法と連体用法においてはほぼ同様である。まず終止用法については次の例のように, 未来のある時点での事柄の実現可能性, あるいは製品の性能を表わしている。

118) いつでも, どこでも, カメラ撮りが可能, 自作番組づくりがてがえるにできます。(朝日・夕, 78.6.6, 広告)

また, 連体用法でも, 「自宅通勤が可能な女性」「自宅通勤ができる女性」, 「公定歩合を引き上げることが可能な情勢」「公定歩合を引き上げることができる情勢」などのように類似性が見られる。

しかし、「可能だ」が形容詞で「できる」が動詞であるという語の性質の違いがあるために、両者には意味・用法の上で次のような違いがある。第一に、「可能だ」のほうは、可能性の程度を表わす副詞「容易に、簡単に、てがるに、たやすく」などの修飾を受けることができないが、「できる」はそれが可能だという点。第二に過去形の用法で、例えば「私はやっと責任を果たすことが可能でした」と「私はやっと責任を果たすことができました」とを比べてみると、前者の文に表現上多少の不自然さはあるが、副詞「やっと」が何を修飾するかの違いとも関連して、後者の文（「できる」を用いたもの）が、過去において事柄がやっと実現したことを表わすのに対して、前者の文は、「やっと責任を果たす」という事態が過去において、実現し得る状態にあったことを表わすだけで、実現したかしなかったかについては言及していないという点である。これに対して「不可能だ」と「できない」とはともに状態を表わすという点で一致し、現在形の終止用法と連体用法、過去形の用法において意味が一致する。

なお、「可能だ」に「なる」を付けて動詞化した「可能になる」は、動詞という点で「できる」と対等の関係にあるように見えるが、「可能になる」は、事柄が実現し得る状態が準備されているという意味であり、「できる」と対等であるとは言えない。意味の同等性ということではむしろ「できるようになる」と対応するものである。

最後に「可能性」という名詞を用いた表現について、ここで言及しておこう。この名詞は、前稿の可能動詞の項で例示した「水の中にいても生き残れる能力を身につける」（例文 37）、「なんとか授業についていける学力をつけてやりたい」（同 38）の「能力」や「学力」と同じように、節による修飾を受ける主要部として用いられることが多い。その場合、修飾部の節となりうる述語の種類は、「能力」や「学力」と「可能性」とでは違いが見られる。「能力」や「学力」の場合は、意志的な動作を表わす動詞、可能動詞、可能の助動詞、「できる」「可能だ」などの、すべて現在形連体用法による修飾限定を受けるのに対して、「可能性」の場合は、意志的な動作を表わす動詞、可能動詞、可能の助動詞、「できる」のほかに（「可能だ」は考えられない）、無意志的な作用や状態を表わす動詞や「～である」を含めたものの、現在形連体用法による修飾限定を受け、さらに、これらの過去形連体用法による修飾限定をも受けるという幅広い用法を持ち、過去・現在・未来にわたる多くの事柄について、その可能性を表わすという点に特徴がある。そして「～可能性はある」という表現形式は「～かもしれない」と類似した意味を表わすものであり、「可能」表現の一つの意味として認めてよいと思われる。修飾部の述語が過去形のものと「である」のもの例を示しておく。

119) (略), すでにゲリラの手によって殺害された可能性が強い, との見方を伝えてきたことを明らかにした。(毎日・夕, 78.6.30)

120) その結果, 同教授は「日本の現代人の足からは想像もできない足跡で, 渡来人のものである可能性が強い」と述べた。(朝日・夕, 78.7.3)

また「可能性」と同義に用いられる名詞に「蓋然性」がある。

- 121) しかし、四十六年の通知の表現が「有機水銀の影響によるものであることを否定し得ない場合」となっていたのと、今回の「医学的にみて水俣病である蓋然性が高いと判断される場合」とだけを比べれば、明らかにニュアンスが違っている。(朝日, 78.7.4)

6. 「動詞+得る」の意味と用法

「得る」の現在形用法では「大阪湾の西風にも耐えうる沖縄産のガジュマル」(毎日, 78.6.7)や「営業を規制しえる効力を有しない」(毎日・夕, 78.6.16)のように、「うる」と「える」の二つの形がある。

この構造に用いられる動詞には、意志的動作か無意志的作用・状態かといった制限はほとんどなく、この構造においてかなり自由に事柄の実現可能性が表現される。しかしこれには、能力や性能を表わす用法は、「貨物車を引きうる男」や「いついかなる場所でも十分な睡眠をとりうる人」のような現在形連体用法には見られるが、現在形終止用法には認めにくいようである。一般的な用例をいくつか挙げておく。

- 122) (略), 明治中期に発足した“新派”の伝統を今日まで持続し得た功績において劇作家川口松太郎の存在は大きい。(毎日・夕, 78.6.15)

- 123) (略), かれの家の資産の支配の下にあった者らをまるごと信じ得ない, ということである。
(『文体』Vol. 2, p. 96 三木卓「牧野信一論」)

- 124) (略), きわめて自由なものとなり得るのに違いない。(『文体』Vol. 2, p. 37 大橋健三郎の文章)

- 125) 今までの河野さんの論旨から言えば, あり得ないですね。(『文体』Vol. 2, p. 65, 吉行淳之介の談話)

動詞の種類に関してさらに付け加えるならば、可能動詞や可能の助動詞の付いたものや「できる」など、それ自体に可能の意味が含まれているものは、意味の冗長性が生じるために、この構造では使われにくいものである。ただ、実際には次の例のように、目にしたり、

- 126) 当社では正確なコース説明が出来得るように ご案内はなるべく案内 テープ又はテキストを読むよう乗務員に指導して居ります。(バス会社車内広告)

また、「できうる限りの努力をいたす所存でございます」などの言い方を耳にしたりすることがあるが、これには意味を強める感じがある。

なお、この構造に関連して「～ざるを得ない」という形式に触れておこう。これには、「～」に用いられる動詞が意志的な動作を表わす場合と、無意志的な作用・状態を表わす場合とで、意味が異なる。意志的な動作を表わす動詞が用いられると、「～ざるを得ない」はいくつか考えられる可能性のうちで選択できるものが一つしかないということ、言い換えれば、義務的・必然的・不可避免的にその動作を押しつけられるということで、「～なければならない」と同義的である(例文 127)。

127) しかし、近代国家の忠実な国民になろうと努力したユダヤ人は、ヨーロッパ諸国が民族主義的統一を追求すると、自分たちがそのわくに収まらないことを認めざるをえなかった。

(朝日・夕, 78.5.8)

他方、無意志的な作用・状態を表わす動詞が用いられると、「～ざるを得ない」は、事柄の必然的な結果としてただ一つの可能性が現象として実現するということを、意味を強めて表現する形式である。この場合「～に違いない」と意味的に近く感じられるかもしれないが、「ざるを得ない」という判断が消極的・受動的なのに対して、「違いない」という判断は積極的・能動的だという違いがある。(例文 128, 129)

128) 「現代の詩や小説は既に滅びかけて居るといふことである」とか言われたら、動揺せざるを得ないだろう。(『文体』Vol. 2, p. 29, 飯島耕一の文章)

129) 恐らく、メーカーは零細下請け業者と素材産業へコスト面でのシワを寄せ、国内販売面では力の弱いディーラーの赤字拡大へシワ寄せされざるを得ないだろう。(朝日・夕, 78.5.8)

7. 「動詞+かねる」の意味と用法

これの用法は、形式上、「～かねる」という肯定用法と「～かねない」という否定用法とに区別することができる。

まず肯定用法では、「～」に來る動詞がおもに意志的な動作を表わすという点に特徴が見られる。この用法について、現在形終止用法と過去形終止用法を取り上げる。現在形終止用法では、「僕は君の意見には首肯しかねる」「今回の裁判所の決定には納得しかねる」のように、動詞の表わす事柄(「首肯する」「納得する」)の実現に対して話手が容認しないという、話手の強い拒否の態度を表わすものから、「每ばん寝るのがおそいので、朝6時にはちょっと起きかねます。」「そんなにたくさんの仕事を1週間ではいたしかねます」(この二例は文化庁『外国人のための基本語用例辞典』から)のように、事柄を実現させることが、話手にとってむずかしいと思われるという判断を示すことによって、相手に対して「ていねいにやわらかくことわる」(同上辞典)意味を表わすものまである。これを、これまでに述べてきた可能表現の諸形式における現在形終止用法と比べてみると、「～かねる」の場合は、この用法において、話手に関する事柄だけを表わして、第三者の動作については表現することができないという、主語における人称制限が見られるのに対して、その他の諸形式の場合にはこの制限がないという違いが観察される。これがもし「～かねている」の形式の現在形終止用法ではその制限がとれて「彼の容態には医者も診断を下しかねている。」(研究社『新和英大辞典(第四版)』の用例)のように、第三者の動作についても表現することができ、話手の相手に対する何らかの態度の表明といった意味も失われて、事柄の単なる描写ということになるのである。次に、過去形終止用法では、「若者たちは連日の厳しい訓練にたまりかねた」「私は彼らの真意をはかりかねた」「僕は列車遅延についての駅員の説明に納得しかねた」のように、「～ことができなかった」と同じような意味が表わされるが、完全に

は、または十分にはそうすることができなかったといった意味を含んでいる点に違いが感じられる。そして、この過去形終止用法では、主語の人称制限は見られなくなるのである。

なお、肯定用法でこのほかに、慣用的な用法の中で、多少意味の変わったものがある。例えば、「申しかねますが、10万円ほど貸していただけないでしょうか。」(『外国人のための基本語用例辞典』の例)では、「申しにくいことですが」のように「～にくい」を用いて言い換え得るものがあり、また『新和英大辞典』にも記述してあるように、「見るに見かねて」「とってもお待ちかねよ」(同辞典の用例)などは「～ていられなくなる」といった意味で使われる。

ところで、肯定用法における動詞が、意志的な動作を表わすものであると述べたが、「その件については私ではわかりかねます」や「これより先は関係者以外の方の立ち入りはできかねます」などの文が考えられる。この場合、「わかる」や「できる」は意志的な動作を表わすとは言えない。これらの動詞はまたそれ自体、可能の意味を含んでいるものでもある。そしてこの文はそれぞれ「わかりません」「できません」と言っても事足りるわけであるが、「かねる」を付けて表現することによって、相手に対して、話手としてはどうすることもできないといった気持ちをやわらげて伝えるような意味合いが感じられる。

次に、否定用法「～かねない」について。肯定用法では、「かねる」の接続する動詞がおもに意志的な動作を表わすものという限定があったが、否定用法での動詞は、これのほかに、無意志的な作用や現象を表わすものでもよいという点に違いがある。例えば次の「なる」「失う」は作用・現象を表わしている。

130) 強引に 共通項を取り出せば、身も蓋もないことに なりかねない のだ。(『文体』 Vol. 3, p. 26, 若林真の文章)

131) そんな時、国民との唯一の 接点である 教育論議を 軽視する日教組は、国民の 支持を 失い かねない のではないか。(毎日, 78.6.10)

もちろん、意志的な動作を表わす動詞(次の下線部)を使って、「あいつなら親友をもあざむきかねない」「放っておけば、いつまでも坐り込み続けかねない」「会社側の出方いかんによっては、組合側が態度を 硬化させて、今後の労使交渉を 一切拒否しかねない情勢である」などのように表現することができる。

では、否定用法はどんな意味を表わすのであろうか。これが「～かねる」の単なる否定でないことは、肯定用法と否定用法とでは動詞の選択に関して意味上の制限があるということや、否定の「ない」と呼応する陳述副詞「決して」「ちっとも」などと共起しないことなどからわかり、「～かねない」を全体でひとまとまりのものとして扱わなければならないことを示している。すると、「～かねない」は「～かもしれない」に言い換え得るような意味、すなわち、話手の不確実な推定を含んでいることに気がつく。そこで両者を比べてみると、「～かもしれない」のほうは「このぶんでは、明日は雨になるかもしれない」「彼は私の申し出を拒否するかもしれない」「私は来年あたり 結婚するかもしれない」「彼は忙しい人だから都合がつけられないかもしれな

い」などのように、意志的動作か無意志的作用・現象か、第三者に関する事柄か話手自身の事柄か、肯定的な事柄か否定的な事柄か、といった区別にかかわらず、話手が不確実な事柄として表現できるのに対して、「～かねない」のほうは、否定的な事柄を推定する用法を持たず、話手自身に関する事柄を対象とする際には、「?私は来年あたり結婚しかねない。」「?万が一私の作品が入選したら、私はとびあがって喜びかねない」など良い評価を伴う動詞は使いにくく、「神主の祝詞を聞くと、私は式場で吹き出しかねない」「妹の結婚式で私は大声をあげて泣きかねないわ」など、つつしまなければならない行為を表わす動詞は使えるというような違いが見られる。このことから、「～かもしれない」は広くさまざまな事柄に関して話手の不確実な推定を表現できるが、「～かねない」は、ある事柄が生じる可能性があるが、そうなると話手にとって好ましくない、不都合だ、びっくりしてしまうといった感情が含まれているというように、意味が限定されているのである。従って、否定用法「～かねない」も、話手にとって望ましくない、驚きだと感じられる事柄の生じる可能性が、不確実ながらも予想されるという意味を表わすとして、可能表現の一つに数えてもよいと思う。

8. 「コト名詞+が+ならない」の意味と用法

この形式で用いられる名詞は、「身動き、我慢、油断」など、数少ないコト名詞で、「～がならない」という否定形式において、「～ができない」と同じ不可能の意味が表わされる。「なる」には基本的に、事柄が成立する、実現するという意味があり、否定表現において、事柄の不成立・非実現（「完全優勝はならなかった」「各党間の合意はついにならなかった」など）、禁止（「この芝生に入ることはならぬ」「夜11時以降の外出はならぬ」など）といった意味とともに、この不可能の意味が生じるのである。

9. 「動詞+がたい」「動詞+にくい」の意味と用法

「あなたの意見には承服し難い」の下線部は「にくい」とも「がたい」とも読むことができるが、「塩は水に溶け難い」の下線部は普通「にくい」と読むであろう。このことは、接尾語「がたい」と「にくい」との間に、共通点もあるが、相違点もあることを示している。では、両者はどんな点で共通し、どんな点で相違しているのであろうか。

まず、これらの接尾語がどんな意味の動詞に付くかに注目すると、「にくい」のほうは、森田良行(1977)も指摘しているように、「事象そのものの性質を表す無意志性の動詞のほか、(中略)意志動詞」(p. 366)にも付く、すなわち、意志的な動作を表わすものにも無意志的な作用・現象を表わすものにも付くのである。他方、「がたい」は「*このガラスは割れがたい」「*彼の文章はわかりがたい」「*縁側の雨戸がしまりがたい」「*この消しゴムは消えがたい」などのように、無意志的な作用・現象を表わす動詞には付かず、「彼の行為は許しがたい」「労使双方の対立は避けがたい」「あいつが賞をもらったなんてとても信じがたい」などのように、意志的な動作を表

わす動詞に付くのである。

次に、「にくい」と「がたい」が、ともに意志的な動作を表わす動詞に付くとは言うものの、多少の違いが感じられる。例えば「しゃべる、まぜっかえす、ひっかける、ぶっとばす、ぶんなげる、～ちゃう（「～てしまう」の意）」など、口頭語として使われやすいものや、尊敬表現の形式（尊敬動詞や「お（ご）～になる」など）には、「にくい」は付くが、「がたい」は付かないか付きにくいと思われる。他方、「がたい」は文章語として使われることが多いと思われ、「にくい」より語感が古く感じられ、「得がたい、耐えがたい、度がたい、有りがたい」のように一つの形容詞となった（例えば『岩波国語辞典（第二版）』では形容詞として採録されている）ものがあるなどのことから、「がたい」は「にくい」より使用範囲が限定されていると言える。

第三に、現在形終止用法で両者を比べてみよう。まず「にくい」のほうで、無意志的な作用・現象を表わす動詞に付く場合は、「ざわついていて、説明が聞こえにくい」「長い間洗わなかったために、汚れが落ちにくい」「水圧が低いせいか、水道が出にくい」などのように、個別的・具体的な作用・現象がとどこおりなく実現することが容易でないという現在の状態を表わすものと、「あの先生の声は通りにくい」「油汚れは普通の洗剤では落ちにくい」「赤ん坊は男より女のほうが比較的病気にかかりにくい」などのように、ある対象について、作用・現象がとどこおりなく実現することが容易でないという性質を持っていることを表わすものがあり、意志的な動作を表わす動詞に付く場合は、「私には彼の気持ちがどうも理解しにくい」「今のような分裂状態では、議長としても事態を收拾しにくい」のように、動作者にとって、動作を実現することが容易でないという現在の状態を表わすものと、「長い間失礼ばかりしているので、先生の家には行きにくい」「いつもお袋さんが出て来てあれこれとしゃべり出すので、彼女の家には電話をかけにくい」のように、とくに話手にとって、動作をすることにいささか抵抗やためらいを感じていることを表わすものと、「この靴は歩きにくい」「家の流し台の配置は使いにくい」「今度出た新製品は前のよりかえって扱いにくい」のように、ある対象について、動作者が動作をするのに不便・不都合な性質を持っていることを表わすものと、さらに、「高校の生徒指導において、女性徒というものは扱いにくい」「薬なんてどれも飲みにくい」のように、ある対象について、動作を行なうことが容易でないという性質を持っていることを表わすものがある。

他方「がたい」のほうは、意志的な動作を表わす動詞に付いて、「私には彼の気持ちがどうしても理解しがたい」「我々〇〇商店街連合会としては大手スーパーの進出は承服しがたい」「誰が何を言おうと、この事実は動かしがたい」「あの無口な男がスピーチコンテストで優勝したとは信じがたい」などのように、動作者が意志的に動作を実現させようとしても、その実現がきわめて困難だ、という状態を表わすものが多いが、また、「骨折した時の痛さときたら、何とも耐えがたい」「バリウムを飲み下すときの気持悪さはとても形容しがたい」のように、対象の性質を表わすと考え得るものもある。

最後に、評価という点から言及しておこう。今までに例示してきた「にくい」の例はほとんど、

良くない、好ましくない評価の文脈の中で使われていた。しかし、『とれにくいネジ』は、はずすときにはマイナスだが、物を止めておくという点ではプラスである。」(森田 1977 p. 366) というような、見かたによって二つの捉えかたのできる事柄がある。このような二様の評価の意味に解釈できる表現としては、ほかに「切れにくい糸、水分が逃げにくい包装、温度が下がりにくい構造、ゴキブリの住みにくい家、動かしにくい庭石、開けにくい扉」など色々考えることができるが、プラス、マイナスどちらの評価を表わすかは、この形式自体からはわからない。この形式が用いられている文脈によって、一方に決まるのである。例えば、「切れにくい糸でしっかり結んでおいたから大丈夫だ」ではプラスの評価「なんて切れにくい糸だろう。ちっとも歯が立たない」ではマイナスの評価が加わることになる。しかし、この二つの文に現われている「切れにくい糸」が仮りに同一の事物だとすると、「切れにくい」というのはある糸の一般的な性質を表わしているというよりも、その糸の用途の適正さのいかんによる動作者のその時どきの感じかたでプラスとも マイナスとも評価されるものであるということになる。これに対して「がたい」のほうは、ことさらプラスとかマイナスの評価を認めるまでもないと思われる。なるほど「南国育ちの私には北国の冬の寒さが耐えがたい」のようにマイナスの評価が感じられるものや「今どき得がたい有能な人物」のようにプラスの評価が感じられるものがある。しかし、この評価はそれぞれ「寒さ」や「有能な人物」に対して与えられたものであって、「がたい」に認められるものとは考えられない。いずれにしても、評価という意味の側面は、「にくい」や「がたい」の語彙的な意味として抽象されうる性質のものではなく、具体的な個々の用法において付随的に現われるものである。そして、その個々の用法において、「がたい」より「にくい」のほうが評価の意味が現われやすい傾向があるとでも言うておけばよいだろう。

10. 「動詞+ようがない」の意味と用法

この形式で用いられる動詞には、意志的な動作を表わすものと無意志的な作用・現象を表わすものとの区別はないようであるが、意志的な動作を表わす動詞では、動作を行なう方法がなくて、その結果それが不可能だ、の意味を表わし、無意志的な作用・現象を表わす動詞では、作用・現象が生じるはずがない、従って、そうならない、の意味を表わすと言えそうである。前者の例としては 132、後者の例としては 133 がある。

132) どんな手続きをとったのか、調査しようとしたが、当時の府関係者は退職したり、死亡したりで調べようがなかった (朝日・夕, 78.7.4)

133) (略), むろん, 女の部屋がどこか, 判りやうはなかった. (『文体』 Vol. 2, p. 230-1, 高井有一「夜の音」)

この二つの用法のうち、前者の場合は、事柄の実現が不可能だということの間接的な表現形式とみることができるが、後者の場合については、「こんないい天気、雨など降りようがない。」「ちょっとやそっとのことでこの鍵がはずれようがない」など単なる事物の作用や現象に関する

ものは除外して、「見える」「聞こえる」「わかる」「受かる」「助かる」「つとまる」「もうかる」など、人間に関係する作用・現象を表わす動詞を用いたものを、可能表現の、やはり間接的な表現形式として考えてもよいと思われる。その場合、例えば「わかりっこない」「できっこない」「書けっこない」「受かりっこない」など「～っこない」の形式と、動詞の種類に違いはあるが、意味的に近い形式だと考えられる。

(注) 出所の明記してない文は、すべて筆者の作例である。

(1979. 9. 26. 未完)